

香気をもたらした四季の讃歌

——匂い・香り・香銘とのコミュニケーション——

● 上 村 代志子

その昔、自然界に芳しい香りが乏しかったとされる日本に、仏教と共に伝来した香りは人々を極楽浄土へ導く神聖な匂いということだけでなく、その心を魅了していったに違いない。

大陸との交流により、梅をはじめ桃、沈丁花、水仙、菊などの甘美な香りを発する草木も移植され、匂いの世界を形成していった。香木を粉末にして他の香料や動物性の物質と練り合わせて作る練香は、仏教儀式と共に、僧侶や貴族たちに日常的に愛用され、やがて宗教性を脱却して玩香の世界へと展開していく。

その薫物の時代を経て、武家によって開かれた一木の香り、つまり、加工品ではなく香木そのものの香りを重用する時代に移っていくとき、数多く輸入された香木一つ一つに銘が付けられた。

江戸中期、香道の隆盛と共に多数の組香が創作され、香銘は単なる香木の名称ではなく、その組香に情趣を付加するものとなり、重要な位置を占めていく。

今回は我が国に於ける香と人々の出会いから、発展の過程を辿る。

1、「匂い」の発見と知覚

仏教が日本に伝来したのは538年説、552年説などがあるが、実際には公伝以前より大陸との交流は民間に於いて行われ、4世紀には伝来していたであろうと云われている。『日本書紀』に初めて香木の名称が出て来るのが553（欽明天皇14）年、「河内国泉郡の茅渟海で雷の様な震響と光り輝く樟木を見つけ献上した。その樟木で仏像二軀が造られた」とある。

続いて595（推古天皇3）年、淡路島に漂着した流木を島人が薪として燃やしたところ、その煙が遠くまで薫り、驚いて献じたとある。この香木は法隆寺（607年創建）に現存し、後に聖徳太子が本尊を刻し、その残りを蔵に保存したとあり、一名を法隆寺、一名を太子と名付けられた。『聖徳太子伝暦』（917、延喜17年）にこのことが有り、香木や香料名が記述されている。

推古天皇の三年、乙卯の春三月、土佐の国の南の海に、夜大なる光あり。また声あって雷の如し。三十ヶ日を経て、夏四月、淡路島の南の岸に着す。島の人、沈水を知らず。薪にまじえて竈に焼く。太子、使いをつかわして、その木を献ぜしむ。大きさ一围、長さ八尺なり。その香、異に薫れり。太子観て大いに悦び、奏していう。「これ沈水香となすものなり。またの名を栴檀香木という。南天竺国の南の海の岸に生ず。夏月諸蛇この木をめぐる。木の性、冷なるが故なり。人、矢をもってこれを射る。冬月蛇かくる。すなわち折ってこれを採る。その実は鶏舌なり。その花は丁子、その脂は薫陸なり。水に沈んで久しきものを沈香となし、久しからざるものを浅香とする。今、陛下釈教を興隆し、仏像を肇造す。故に釈梵（帝釈天と梵天）その徳を感じ、この木を漂着せしむ。」すなわち百済の工人に勅命して、檀像（仏像）を刻造し、高さ数尺の観音菩薩を造り、吉野の比蘇寺に安置す。時時光りを放つ。（原文は漢文）

大寺院や宮殿が唐風の極彩色に彩られた奈良の都では、僧侶や貴族たちは仏教を崇拝し、異国の文化に心酔していた。隋・唐代の流行に習い仏前で焼香供養する香炉として柄のついた柄香炉も多く用いられ、仏像、仏画にもよく見受けられるが、唐招提寺には煙を立たせるその頃の柄香炉が多く蔵されている。多くの香木、香料も輸入され、これらは仏教儀式に用いるだけでなく、薬品としても重要であった。法隆寺の財産目録に薫陸香、沈水香、棧香、青木香、白檀香、丁香、安息香、甘松香、楓香、蘇合香、麝香、鬱金、甲香、香附子、詹糖香、桂心など。大安寺には衣香、百和香、零陵香、藿香の名称も記載されている。正倉院の買物申請帳（752、天平勝宝4年）には薫衣香、薫香、竜腦香、えび香の名もある。衣香、薫香、薫衣香、えび香、百和香等は調合香料であり、数種の香料を混ぜてそれぞれの用途に向くように加工、調整したものである。法隆寺と大安寺の財産目録の在庫量を見ると、

(1)沈香と棧香、(2)薫陸香（すなわち乳香）、(3)青木香、(4)白檀（すなわち梅檀）の順になっていて、唐代の香料使用の状態をそのまま反映し、沈香が中心であることがよくわかる。（『香料』p25）

一方、甲香という貝殻を焼いて粉末にしたものが多量にある。これ自体は香りが良くないが、他の香料に混ぜて焚くと香りを安定させ、長もちさせる役目を果たす。これが使用された事は、輸入した香料を基に調合され、焚かれていたという裏付にもなろう。

754（天平勝宝6）年唐の学僧鑑真が失明等の苦難の末、来日する。鑑真は練香に必要な材料を多数紹介し、調合、製造方法を伝えたとされる。

この様に飛鳥、奈良と、外来文化により僧侶、貴族の生活に香が次第に浸透し、嗜好へ、遊戯へと展開していく。

ここで『万葉集』にあらわれた香りと、『古今和歌集』のそれとの違いを見ることにする。

「梅」は正月には欠かせない花で、外来種とは思えない程であるが、中国原産で天平時代には既に移植されていたと言われている。『万葉集』に120首ほど詠まれているが、梅の香を詠んだのは「梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ」（市原王）1首のみであり、おいとして詠まれているのも僅かである。当時は未だ貴族など一部の階級だけにしか梅は知られていなかったと言えるし、「匂」は本来視覚語で「朝日に匂う山桜花」など色が美しく映える様子を表す。

嗅覚的に捉えられている歌に「あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」（大宰少弐小野老朝臣）があり、「薫」（におう）が使われている。橘が嗅覚的に詠まれた歌も数首有るが、『万葉集』には花について「かおる」と詠んだ歌は無い。本居宣長も「いにしへは全て香をめでることはなかった」と記している。日本の風土と日本人の体質などとも関係して、その時代、香りについての知覚が未だ乏しかったと言えるのではないか。ところが『古今和歌集』になると梅の花の香と匂いだけで17首数えられ、人々が香りに目覚めていった表れと見る事ができよう。

彼ら（古代人）の香と臭に対する感覚は、彼らを取りまいて自然の匂いを、彼らの本能によって意識しているだけである。（中略）『万葉』の頃の歌人たちは、自然の匂いは知っていた。しかし匂いそれ自体を匂いとして取りあげるまでにはいたっていない。仏教一色に塗りつぶされていた一部少数の貴族と僧侶だけが、香というもの、すなわち仏教儀礼品に欠くことのできないものとして知っていたのである。だから香の匂いは仏教に従属している。それが次の時代になると、仏陀から匂いが解放されて、匂いだけが趣味的に情意の世界で楽し

まれるようになる。『古今集』の時代がそれである。とともに異国から渡ってくる香の匂いの中に、日本人としての匂いを見出すようになってくる。仏陀の匂いの中に、例え現実的な人間的なものを、ある限定された極めて少数のひとびとが知っていたとしても、それは唐風一色であって、まだ日本人としての香すなわち匂いではなかった。(『香料』p43)

2、濃艶優美な薫物

仏教には欠かせない香、経典には塗香など様々な香が示され、それらの和合法も表されている。仏教以外、公には宮廷の儀式や盟約の座などを清める空薫、私的には居室に芳香を薫らせ、衣服や髪に香を焚き染めた。薫物以外では香木の塵末を集めて香囊としたり、柱に掛けて室内を清める掛香や匂い袋が日常的に用いられた。また、宮廷人の礼として蔵人職の役人は鶏舌香等の香料を口に含んで口臭を消し、天子に奏対することが身嗜みであった。いわゆる含香である。

貴族たちはより優れた薫物、芳香を求めて創意工夫を重ね、その調合の秘法は教養の証しともなった。互いの薫物の優劣を競う薫物合、玩香への傾斜である。

『源氏物語』は香りを抜きにしては成立しないほど香が登場する。仏前の名香の香り、部屋の空薫物、個々の衣の香り、身の回りの物にも香りを付ける。庭には季節の芳しい花木や草木、梅や橘や菊……。それらは薫風となってどれほど遠くまで届いたことか。濃艶な香りの世界が想像される。今でも昔の製法に習い作ったとされる練香が販売されているが、何もせず袋に入っただけでもその匂いは強く、焚くと更に濃厚な香りが漂う。

当時の薫物の代表的な物に「六種の薫物」がある。「黒方、梅花、荷葉、侍従、菊花、落葉」であり、他に「夏衣」「松風」「菊の露」「漁り舟」「榊葉」「仙人」「花橘」「篝火」「新枕」「おそ桜」「玉椿」「夕嵐」「夕顔」などが少し時を経て作られた。薫物の名前に、『源氏物語』から取られた名が数多く見受けられる。多くの薫物銘は文学と関連し、香りと銘で優劣を競う薫物合が盛んに行われるようになる。

このような匂いの発見と知覚を、人間として直接に感じあるいはそのまま表現しようとはしていない。四季の変化と自然環境の中に匂いをはめこんで、それを通じて匂いを表現しようとしている。しかもそれは淡い四季の草花や、四季の移り変りの匂いであった。かの女の移り香は今をさかる紅梅の花の匂いであるという。人間感情の直接的な表現、例えば喜怒・愛憎・苦楽・好悪など、人間本来の情と意に直接つながるような匂いの表現ではなかった。風土の姿とそこに生育するもの―草木や鳥獣など―を通じ、それによって匂いを表現し、知りそして聞くことは、日本的な匂いの発見であろう。ところが、このようなものの見方すなわち匂いの発見（と知覚）には、それを知りそして感じるができるために、ある前提が必要とされる。その前提として限られた一部の貴族社会、それから彼らの教育・知覚など色々の条件がある。これが王朝宮廷人の薫物であったろう。(『香料』p67～68)

3、一木の香りから香銘へ

正倉院の蘭奢待（別名東大寺）は法隆寺（別名太子）と並んであまりにも有名であるが、その名が出てきたのが1367（貞治6）年の『新札往来』とされる。それより以前、1193（建久4）年、東大寺の勅封蔵修理目録に黄熟香として挙げられている。

武士の台頭により香りの世界は大きく姿を変える。加工品の練香、薫物の濃艶な香りから枯淡の一木の香りが重用されるようになる。沈香木そのものを焚くことは、インドより中国へ、そし

て日本へと伝来したとされているし、練香を調整する折にも当然材料である香木の香りを試してみることが行われていたわけであるから、それが展開して、一木の香りが表舞台に登場したということになる。それら香木には必然的に名称が付けられていくが、それは中国で行われていたことで、馬蹄香、青桂香、鶏骨香、鷓鴣斑、黃熟香の名称があり、同名が日本でも見受けられる。

典型的な婆娑羅大名の佐々木道嘗は1366（貞治5）年3月4日の大原野の花会で寺院の藤の枝ごとに香炉を吊り下げ鶏舌香を盛んに焚き、本堂の庭では香炉二つに名香を一度に大量に焚いたので薫風が四方に散って人々は浮香の世界にいるようだったと記されている。沈香は当時でも非常に高価であり、中国のようにふんだんに焚いて香りを満喫することは大名でもできなかった。道嘗が所有していた多くの香木は、死後足利義政の元にもたらされ、後に名香として数えられていく。

この時代に輸入された大量の香木が、薫物と同様にそのひとつずつに付けられた雅名の一部を香銘目録から記す。

○『異制庭訓往来』所載香銘（14世紀後半、香銘の初出とされている。）

伽藍木	妬伽羅	宇治	鳥羽	山陰					
柴山	深山	奥山	富士峰	武蔵野	梅花	菊花	橘花		
野菊	水蓼	薄雲	薄霧	薄雪	薄霞	女郎花	茶煙		
龍涎	白檀	薰陸	八精	など					

足利義政の時代は世の乱れをよそに香、茶、花、連歌などの催しが盛んになり、香銘は連歌と深く関わり、その立場を確立していく。単なる香木の銘から、その銘の背景にある文学や故実などがクローズアップされ、多面的に捉えられるようになり、その意味合いが深化されていった。

○『香道秘伝』改正「六十一種名香」

「名香」は数や組合せが異なって何組もまとめられたが、その中で六十一種名香は元龜・天正の頃に志野家を継ぐ人々によりまとめられたのであらうとされている。

法隆寺（太子とも） 東大寺（蘭奢待とも） 逍遙 三芳野 紅塵 古木 中川 法花経
 盧橘 八橋 園城寺 以上十一種

似 富士煙 菖蒲 般若 鷓鴣斑 楊貴妃 青梅 飛梅 種島 滯標 月 竜田 紅葉賀
 斜月 白梅 千鳥 法花 老梅 八重垣 花宴 花雪 明月 賀 蘭子 卓 橘 花散里
 丹霞 花形見 明石 須磨 上薫 十五夜 隣家 夕時雨 手枕 晨明 雲井 紅 泊瀬
 寒梅 二葉 早梅 霜夜 寢覚 七夕 篠目 薄紅 薄雲 上馬

以上五十種。先の十一種と合わせて計六十一種。

香銘は江戸時代、安永天明の頃（18世紀後半）には二千数百もあったとされている。分類法は種々あるが、次に主なものを記す。

・出所	東大寺	法華	難波	三輪	瀬戸	園城寺
・色や形状	紅塵	白雲	臘梅	黒香	金伽羅	
・草花木	榊葉	夕顔	白梅	山桜	すみれ	
・故実	飛梅	吐月	念珠	太子	法隆寺	蘭奢待 丹霞
・木所	林月	煙競	残雪	白雲	山の井	

・姓や氏	中川	清水	玄宗	楊貴妃	李夫人		
・詩歌や物語	藤袴	白菊	初音	柴舟	夕時雨	花散里	明石

4、香銘の深化

二種以上の香りを組み合わせ、和歌や物語に因んで構成されたものが組香であるが、それら選ばれる香木は、香気だけでなく銘も重要な役割を与えられるようになる。組香の隆盛は江戸中期であり、町民、農民の裕福な人々にまで普及していった。

香筵では予め客に香組が示されるが、それは組香の構成内容を示すもので、主要な名称や数字、それに使われた香木の銘及び木所（六国の種類名）を表したものである。（木所は明示しない流儀もある。）芝居にたとえば、その物語の登場人物は不変であるが、演じる役者や衣裳はその時々によって異なる。この役者や衣裳の部分が香木の木所と銘にあたり、演出家が出香者にあたると言えよう。視覚的に直接訴える香組は香が炷かれる前に提示され、客はこれから繰り広げられる香の世界を様々なイメージすることになる。

次に過去に行われた組香の香組を紹介する。

○「十炷香」香組

十炷香は組香の最も古い形で、足利時代にその文字が文献に見られる。一の香り、二の香り、三の香り、ウ（客）の香りの4種の香で構成される。試香として、一、二、三はあらかじめ客が聞く香りであるが、ウは知らされない香りとなる。本香で一、二、三の香が各3包、ウが1包、合計10包炷かれるのでこの名がある。十炷香は組香自体に文学的テーマは持たないので、香を組む者が自由に自身の感覚で香銘を選ぶことができる。

ここで香銘の役割、効果について、三條西公正氏の説を引用する。

（香銘）

例、	一	春の山邊	
	二	くれなる	
	三	竹の葉	
	ウ	山かは	（『槐記』享保9年）

数字で表現された組香の場合は、常に「一」の香が香組の基準である。（中略）その基準をなす香を「春の山邊」という名香で表現されているので、我々は実際の春の山邊の有様を思い浮かべればそれでよいのである。その結果は何か実感が浮かんでくる筈である。あるいは実感でなく詩歌を思い出して想像を馳せてもよい。いずれにせよ、新たに何か一つの感をこの「春の山邊」という香銘から得ればよいのである。一つの感が生じた時、もし判断がつけば、その香の木所を注意深く味わうべきである。するとこの香が伽羅であることに思い当たるであろう。それから先はその伽羅の立ち方によって、その「春の山邊」をいかなるところに求むべきかを想像するところに、香席の興味の第一歩がある。漠然と春の山邊を想像したのだから、春の山邊であれば初春であろうと季春であろうと差支えないことになるので、それを一定の時節に限定しているのが、「二」の香の「くれなる」である。この言葉があるので、出香者の脳裏には、桜の花盛りの山邊の景色を描かんと試みている趣が知られ、春酣の時を表現するに伽羅を配して、その美しさを偲ばしめんと努力しているのが感じられる。従って、出香者の意図はこの二つで充分現わされているので、「三」の香に至っては趣をかせ、ワキ役的の意味で「竹の葉」を用いたのであろう。これによって緑を連想せしめた技法は優れている。俗気を離脱した趣がみられよう。松とか杉とか柳

という月次のものを避けたために、この香組に反って高い気品をもたらしめているのに気づかれよう。しかも竹ならば場所的にも支障をきたさない極めて自然の描写である。香組が芸術だといわれるゆえんはこの辺の感覚から興るのであろう。理に馳せらずしかも自然の美を捕えているところに、出香者の優れた技能が認められる。「ウ」の香の「山かは」は山邊の景色として、小川の流は屢々見受けられるので結びの意味で選ばれたものであろう。最初の「春の山邊」との連絡もつくばかりでなく、水の光に紅や緑が一層引き立てられた感さえある。(中略)一つの絵画であり、一つの詩境を暗示している。四つの銘によって新しい一つの世界を創造している。既往のどこにもない世界が出現されている。それは文学的創作に相通ずるもので、まさに詩の世界にほかならない。何が要素となってかくの如き世界が出現したのかはいまでもなく香銘とその配列の妙によるのである。(中略)どこか連歌に通ずるものを覚え得るのではあるまいか。(『組香の鑑賞』p166～169)

付記1 出香者 三條西堯山(公正)(昭和58年8月6日、百炷香)

	(第5回香組)	(第7回香組)	(第9回香組)
一	せせらぎ	つれづれ	残雪
二	憩	花衣	こまぐさ
三	宵闇	端溪	雲海
ウ	蛭狩	文合	よろこび (『かおり』第19号 p83～84)

※百炷香とは十炷香を続けて10回行うところからこの名がある。銘については全体的な流れがあるが、あえてその中から取り上げた。木所も省略する。

付記2 出香者 元成(古人)(2月15日)

一	さわらび
二	かすみ
三	なか川
ウ	一こ糸 (『香道 歴史と文学』p78)

○「舞楽香」香組

(香銘)

青海	花すすき
敷手	白 菊
柳花	松の月
白浜	露の泪
客	孔 雀
大枝流芳 編(『香道瀧之絲』下 享保18年)	

大枝流芳(岩田信安)は江戸時代中期の文人であり、香だけでなく諸芸に通じた人物と言われている。

「舞楽香」は『源氏物語』の紅葉賀と花宴の中の舞楽の部分の採って作られている盤物の一つで、人形等の立物が盤の上で香を聞きあてた分だけ動くのであり、光源氏と朧月夜の人形、幔幕、紅葉、桜、楽太鼓、楽証鞍、かざしの菊、かざしの紅葉、雲に月の扇が立物として用いられる。桧賀方(光源氏)と花宴方(朧月夜)の2組に分れ、団体戦となり、盤上の勝負の場に早く着い

た方が勝となる。舞楽や雅楽の名称で構成された要素の青海（青海波）、敷手、柳花（柳花苑）、白浜に試香があり、本香では客を含め各2包計10包が炷かれる。

香組を見ると自ずと秋の景色が感じられ、香銘の花すすきや白菊の風に揺れる様を浪としてとらえて、それを青海波を舞う光源氏の優美な舞姿に重ね合わせていると思われる。青海波は舞楽中最も華麗で優雅な名曲とされ、波のうねりを表した文様の衣装で舞う。「花すすき」と「白菊」は勅銘香でもある。

秋のイメージの代表としての月、松の木の間をゆったりとして移動する白く輝く月・・・しかし松の木立は不動である。他の物が総て動きを表しているとする、松の枝は揺れても不動なその樹木との対比で逆に動きが強調される。また「松」は木立の松と月を待つ、誰かを待つ、の意を掛けているとも思われる。

この組香の「客」は源氏と朧月夜を意味しているが、その香銘「孔雀」は二百種名香や『雪月花集』の五十種の内の一つで珍しい香とされる。羽根を広げた美しい孔雀の姿は、舞楽という華やかなテーマにふさわしく、香組を見ただけでもその光景が偲ばれ、その香気と共に、より一層イメージの中に入り込んでいくことになる。盤物という立物などが不要にさえ思われる。

またこの組香には色彩の対比が隠されている。白は秋の象徴であり、「白浜」はもとより「青海」「柳花」「敷手」にも白を感じる。青海は波頭の白、柳の花は白であり、敷手は舞楽の一つで、舞の途中で袍の右肩を脱ぐが、そこにあらわれるのは白の下襲である。香を組む者はその白を意識して花すすき、白菊、露を選び、月を選んだと思われる。モノトーンの世界が浮かぶ。ゆったりとした大きなうねり、そして吸い込まれていくような足元の小さな動き、天と地と総てが墨絵の世界のようである。それが孔雀という極彩色の大きな鳥によって打ち破られる。静から動への転換であり、舞楽にふさわしい妙味を感じる。

このように香銘など香組により、出香者からのコミュニケーションを客は個々の感性によって捉え、色彩や舞や楽の音などをイメージしつつ、香気の中でその美を享受するのである。

5、むすび

改めて思う、匂いとコミュニケーションにより、それを知覚し自分のものとして「香・か」へ発展させ、昇華させた先人たちの感性の豊かさを。

今、周囲には人工的な匂いが満ち溢れ、季節感も薄らいできた。しかし香銘を考える時、学生の多くは好きな草花や季節の美しい草木の名を挙げる。香銘を考えるのは楽しいとも言う。我々は四季のうつろいを草花など植物の匂い、香りに感じているのである。

このほど開かれた香筵は、鑑賞香で、香銘「松しま」「常世の春」「十文字」であった。大震災、津波に引き続く原発事故の東北。代表的な名所の一つである「松島」の銘から、そして「常世」という文字から、今なお困窮する人々に思いを馳せ、人々の営みの永劫を願わずにはいられなかった。和服姿が並ぶ静寂な大広間、庭園にふり注ぐ初春の穏やかな陽の光、ふくよかな香りは心を癒し、希望を与えてくれた。

道端の水仙が静かに風に揺れ、梅もほころんでいる。桜の開花が待ち遠しい。そして、その風景の中にはいつも香りが・・・そっと寄り添っている。

【参考文献】

- ・大枝流芳『香道瀧之絲』上下 1733（享保18）年
- ・三條西公正『組香の鑑賞』（理想社 1965年）

- ・三條西公正『香道 歴史と文学』（淡交社 1971年）
- ・一色梨郷『香道乃あゆみ』（芦書房 1968年）
- ・山田憲太郎『香料 日本のにおい』（法政大学出版局 1978年）
- ・日本香道協学会誌『かおり』第19号（日本香道協会 1983年）
- ・日中文化交流史研究会 蔵中 進 他『聖徳太子伝暦』影印と研究（東大寺図書館蔵、文明十六年書写）
（桜楓社 1985年）
- ・山根 京・翠川文子『忍鎧の香道著作』香道双書2（香道に親しむ会 2008年）
- ・小秋元 段 他『校訂 京大本 太平記』下（勉誠出版 2011年）
- ・寺山 宏『和漢古典植物考』（八坂書房 2003年）